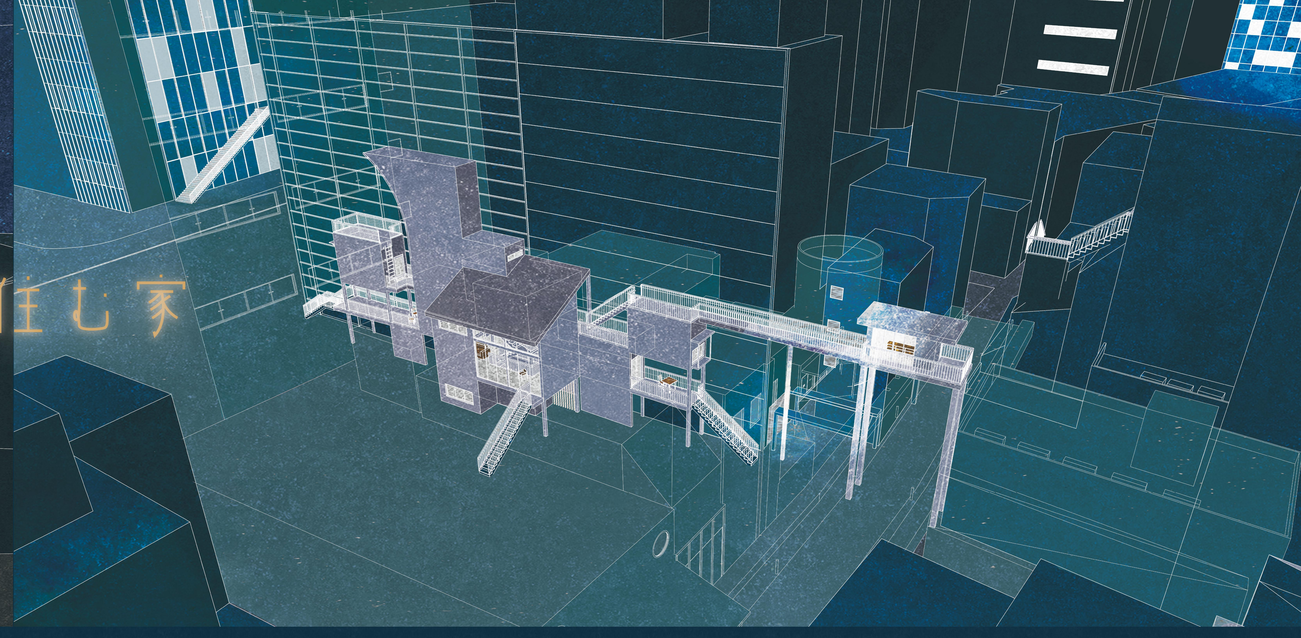
月の住む家



01 背景

長い人類の歴史の中では、夜は活動から休息に切り替わる象徴的な時間であった。しかし、社会が多様化・複雑化していくにつれ、人々はその活動範囲を夜に広げていった。そんな現代社会の中では、夜に目を覚まし、昼に眠りにつく、昼夜逆転した生活を送る人が存在する。通常の生活リズムを送る人を「太陽の人」昼夜逆転した生活を送る人を「月の人」と呼ぶことにする。

02 設計趣旨

かくいう私も「月の人」である。
授業とサークル活動を両立した上で学費を自分で稼ぐことになってしまい、深夜から朝までバイトを入れる日々が続く中で、いつしか朝に寝て昼過ぎに起きる生活が習慣づいてしまった。そんな私のことを、友人は「だらしがない」「変わっている」と馬鹿にすることがある。「あいつはきっと寝ているから」と気遣われ、連絡をとるのを避けられることがある。両親が寝静まった後は妙な寂しさを感じ、深夜の街を徘徊することがある。

月の人たちには、月の人にならざるを得なかった理由が存在する。
そして、そんな彼らには、他者の存在を感じ自身の生活リズムを肯定することができる住宅が必要であると私は考える。

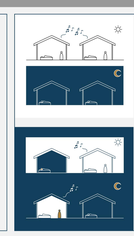
03 月の人の生態

04 設計条件 ～月の人と太陽の人の生活の比較～

起床時には日光を浴び就寝前には照明を抑えることで体内時計を調整できる。

光の問題

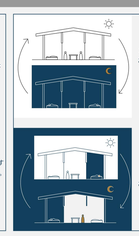
起床時には日光を浴びることができず、就寝時には室内に日光が入ることで体内時計が狂う。



同じ時間帯に活動するため互いの生活音が気になることは少ない。

音の問題

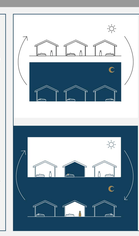
逆の生活リズムで過ごすため、月の人と太陽の人はお互いの出す音がストレスとなることがある。一方で、適度な音の存在は良い睡眠・生活をもたらすこともある。



太陽の人同士が同居する場合。おおよそ同じ時間に活動・就寝するため直接交流する時間が確保できる。

内の孤独

月の人と太陽の人が同居する場合、お互いの生活リズムが重ならず孤独を感じることがある。



おおよそ周囲の住民と同じリズムで活動するため、同じ街に暮らす人の存在を感じることができる。

外の孤独

月の人の活動時には街は静まり返っており、同じ街に暮らす人の存在を感じられず、孤独を感じることがある。

05 手法

月の人に生じる光の問題と音の問題を踏まえた上で、内と外、それぞれの孤独に対応する住宅を設計する。

光の問題

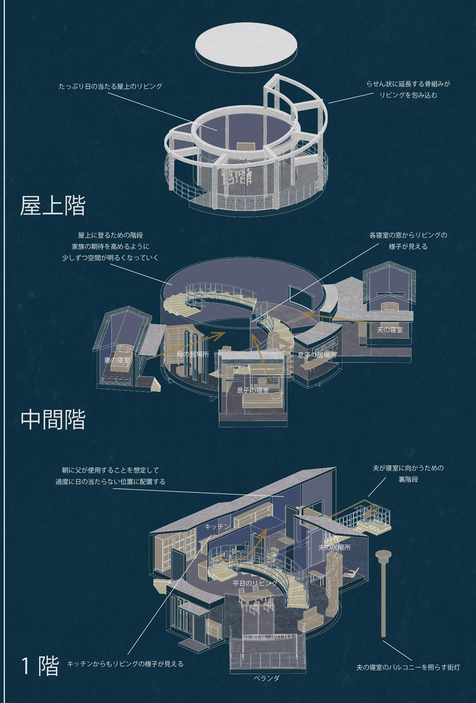
音の問題

内の孤独

外の孤独

Case1~ 内の孤独を癒す家～

夜勤労働者とその家族を人物設定に定め、一般的な住宅街に設計する。



分解アクソメ図

人物設定

夫（月の人）

- 夜間の工事作業員。
- 家族と触れ合う時間が少なく寂しさを感じている。
- 神経質で、些細な物音で目が覚めやすい。

妻（太陽の人）

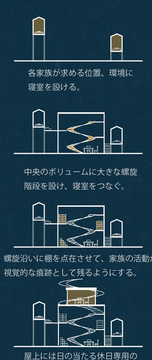
- 短時間のパート勤務。
- 寝言が激しく、息子を起こしてしまうのを気にしている。
- 寝起きが悪く、強い日光を浴びるとめまいがしてしまう。

息子（太陽の人）

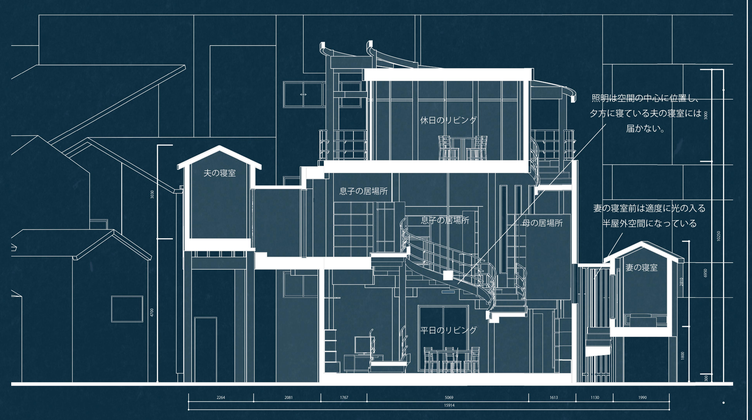
- 小学校低学年。
- 寝起きがよく、朝はたっぷりと日の光を浴びたい。

生活リズム

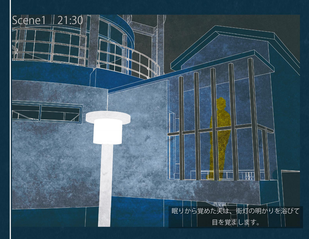
手法

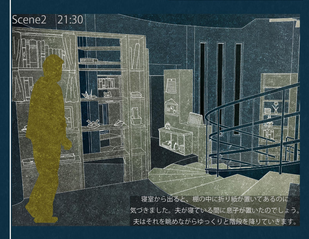


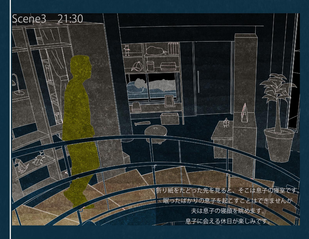
1. 各家族が求める位置、環境に寝室を設ける。
2. 中央のボリュームに大きな螺旋階段を設け、寝室をつなぐ。
3. 螺旋沿いに棚を点在させて、家族の活動が視覚的な痕跡として残るようにする。
4. 屋上には日の当たる休日専用のリビングを設ける

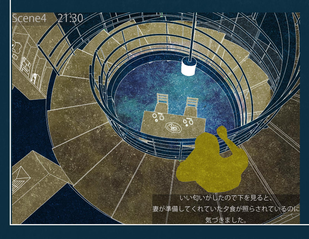


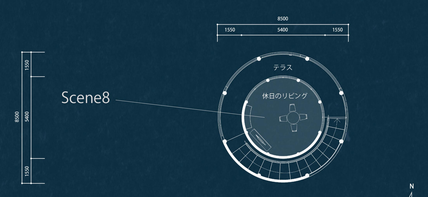
断面図 1/50



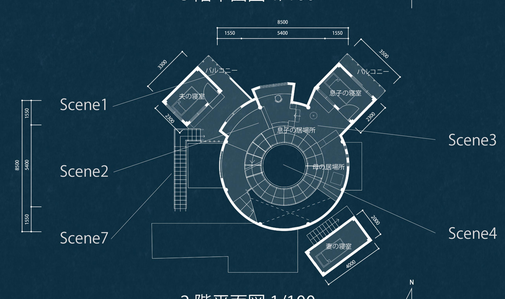






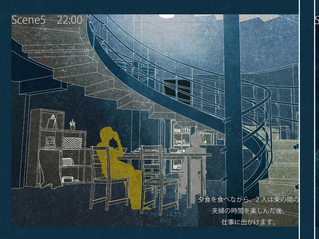


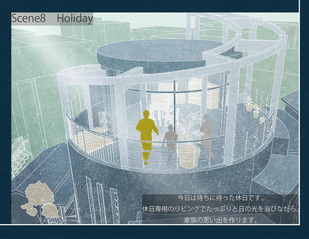
3 階平面図 1/100



2 階平面図 1/100

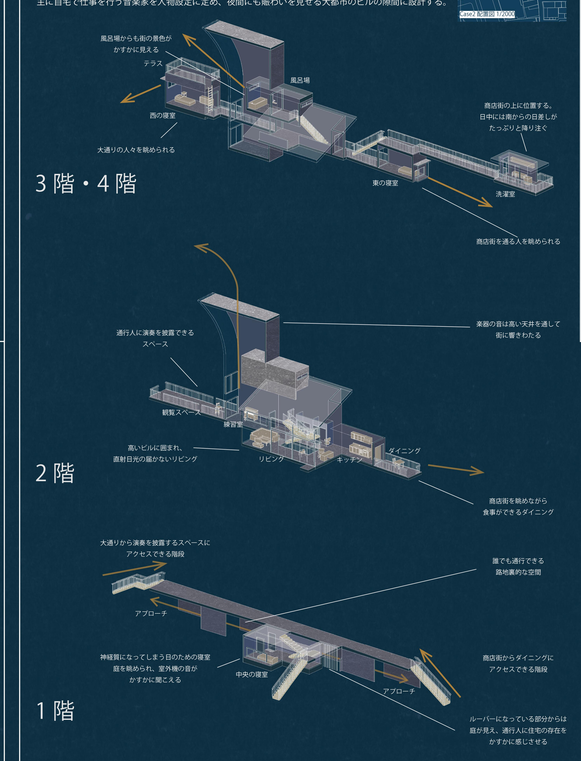
1 階平面図 1/100





Case2~ 外の孤独を癒す家～

主に自宅で仕事を行う音楽家を人物設定に定め、夜間にも賑わいを見せる大都市のビルの隙間に設計する。



分解アクソメ図

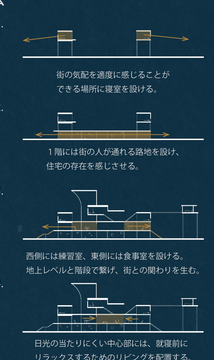
人物設定

音楽家（月の人）

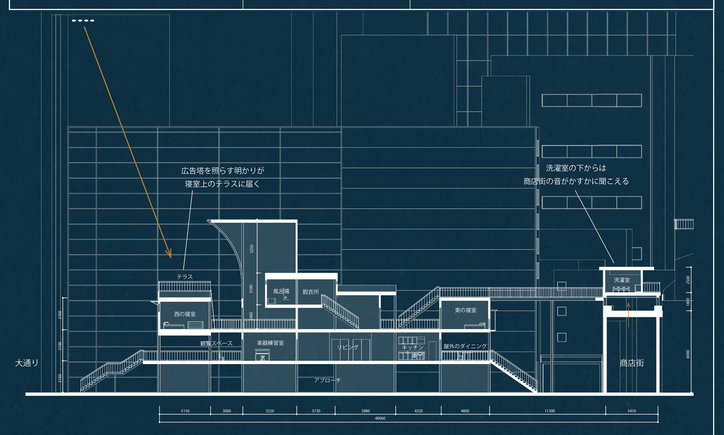
- 自宅で作曲活動を行う。
- 深夜になるとインスピレーションが湧いてくるため、昼夜逆転した生活リズムを好む。
- 人見知りである一方で寂しがり屋で、ささやかな人とのつながりを求める。
- 気分屋な性格で、その日の気分によって寝る場所を変える。
- 無音の環境だとかえって眠りにつきにくい体質である。

生活リズム

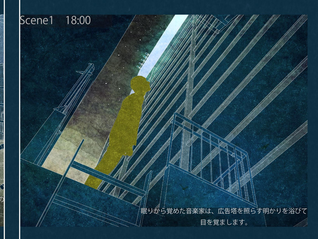
手法

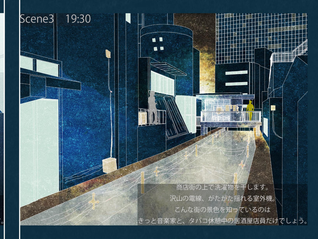


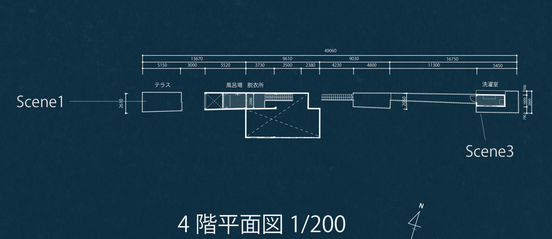
1. 街の気配を適度に感じることができる場所に寝室を設ける。
2. 1 階には街の人が通れる路地を設け、住宅の存在を感じさせる。
3. 西側には練習室、東側には食事室を設ける。地上レベルと階段で繋げ、街との関わりを生む。
4. 日光の当たりにくい中心部には、就寝前にリラックスするためのリビングを配置する。



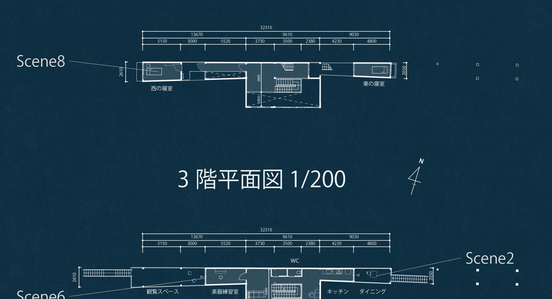
断面図 1/150



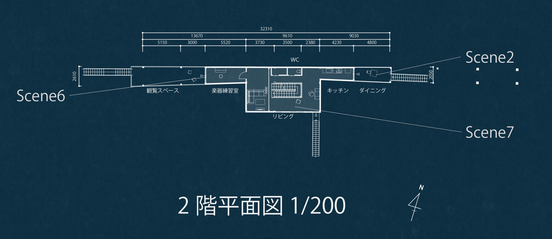




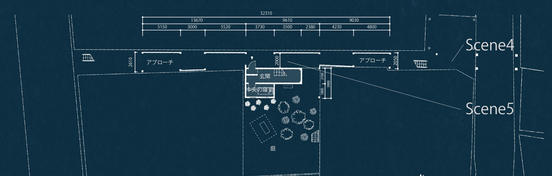
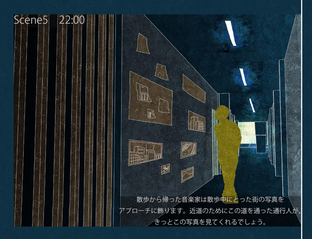
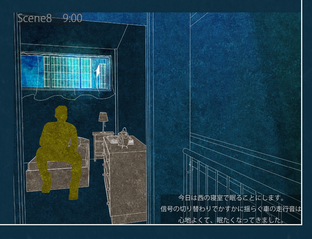
4 階平面図 1/200



3 階平面図 1/200



2 階平面図 1/200



1 階平面図 1/200